

品川区ヤングケアラー支援事業 学校・関係機関職員向けアンケート調査結果 概要

調査目的

今後の品川区のヤングケアラーへの支援体制整備の参考とするため、
①学校関係者②普及啓発の研修に参加した関係職員に対して、ヤングケアラーに対する意識と実態について調査を実施。

調査時期

- | | |
|-----------------|-----------------------|
| ①学校関係者向けアンケート調査 | 令和4年6月15日(水)～7月19日(火) |
| ②関係機関向けアンケート調査 | 令和4年7月20日(水)～9月1日(木) |

調査対象

- ①学校関係者向けアンケート調査
区立小中学校及び義務教育学校の教職員等、学校関係者
- ②関係機関向けアンケート調査
品川区子ども家庭支援センターが開催したヤングケアラー研修会のうち、
「区役所職員向け研修会(全3回)」 「関係機関向け研修会(全3回)」 「保育園・幼稚園職員向け研修会(全3回)」の参加者

回答者数

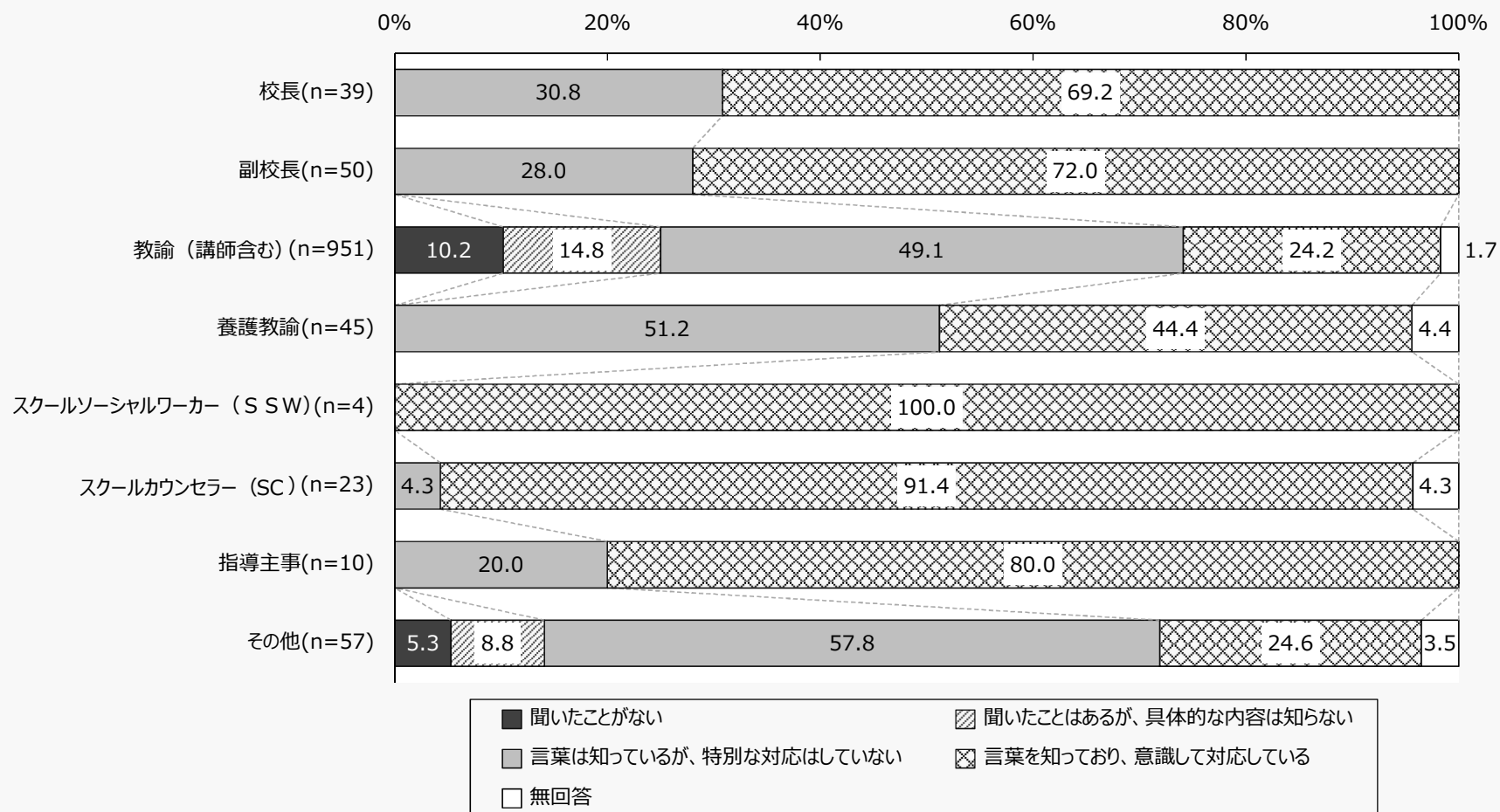
- | | |
|-----------------|----------------|
| ①学校関係者向けアンケート調査 | ②関係機関向けアンケート調査 |
| 1,195部 | 345部 |

①学校関係者向けアンケート調査

①学校関係者向けアンケート調査

回答者の職名別認知度について

教諭（講師含む）で7割以上が認知している一方、10.2%が「聞いたことがない」、14.8%が「聞いたことはあるが、具体的な内容は知らない」と回答しており、周知・啓発が必要と考えられる。また、日ごろ子どもたちと接する時間が長い教諭（講師含む）や養護教諭は「言葉は知っているが、特別な対応はしていない」の割合が約5割となっており、ヤングケアラーへの関わり方や、必要な支援へのつなぎ方に対して課題を抱えていると推測される。

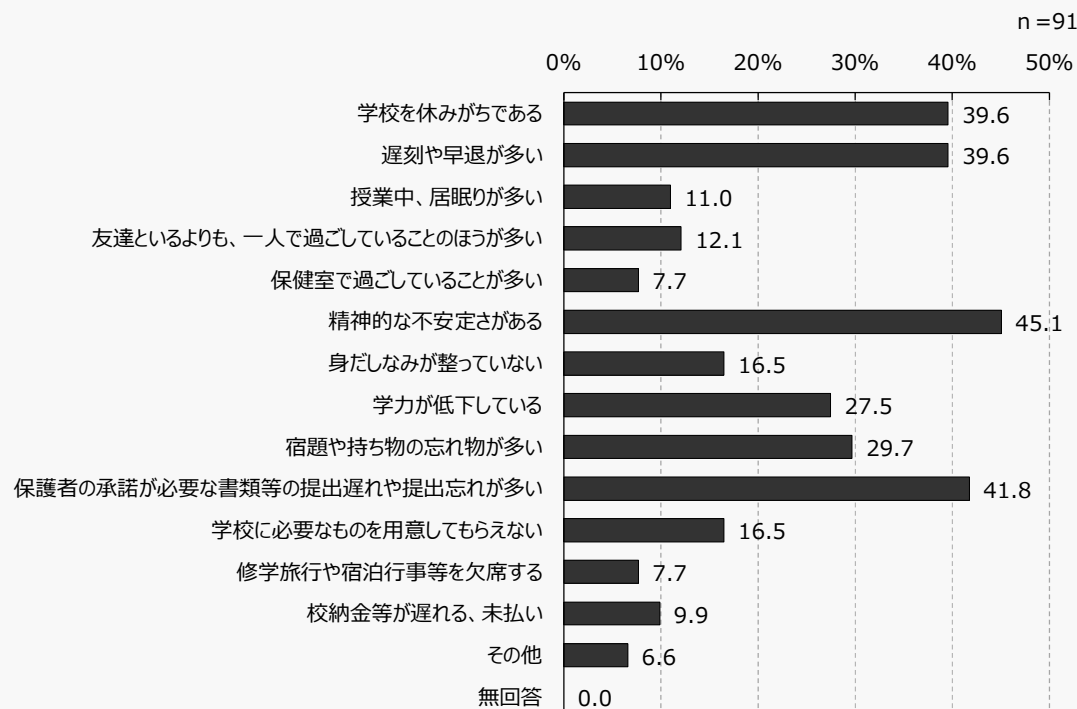
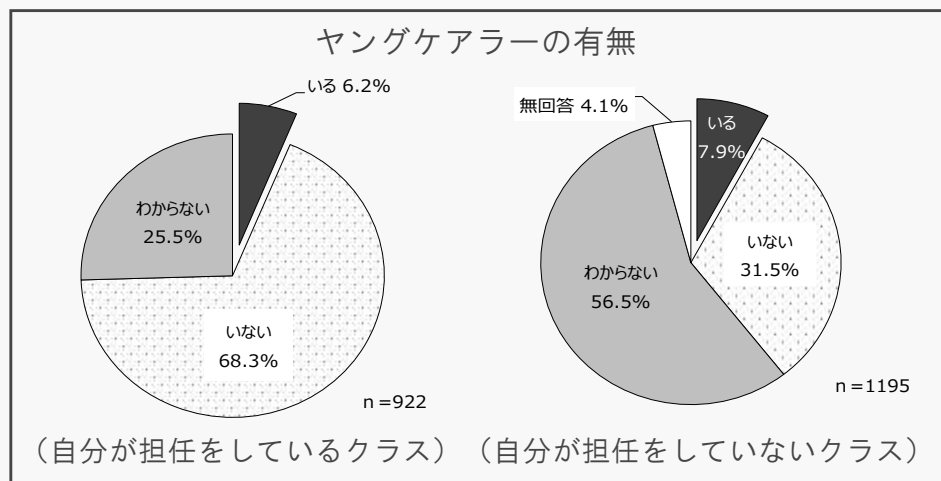


①学校関係者向けアンケート調査

現在関わっている子どもについて

今年度、担任をしているクラスにヤングケアラーと思われる子どもが「いる」と回答した割合は6.2%、担任をしていないクラスにヤングケアラーと思われる子どもが「いる」と回答した割合は7.9%となっている。

ヤングケアラーと思われる子どもがいると回答した人に子どもに出ている学校生活の影響を聞いたところ、「精神的な不安定さがある」が最も多く、次いで「保護者の承諾が必要な書類等の提出遅れや提出忘れが多い」、「学校を休みがちである」及び「遅刻や早退が多い」となっている。

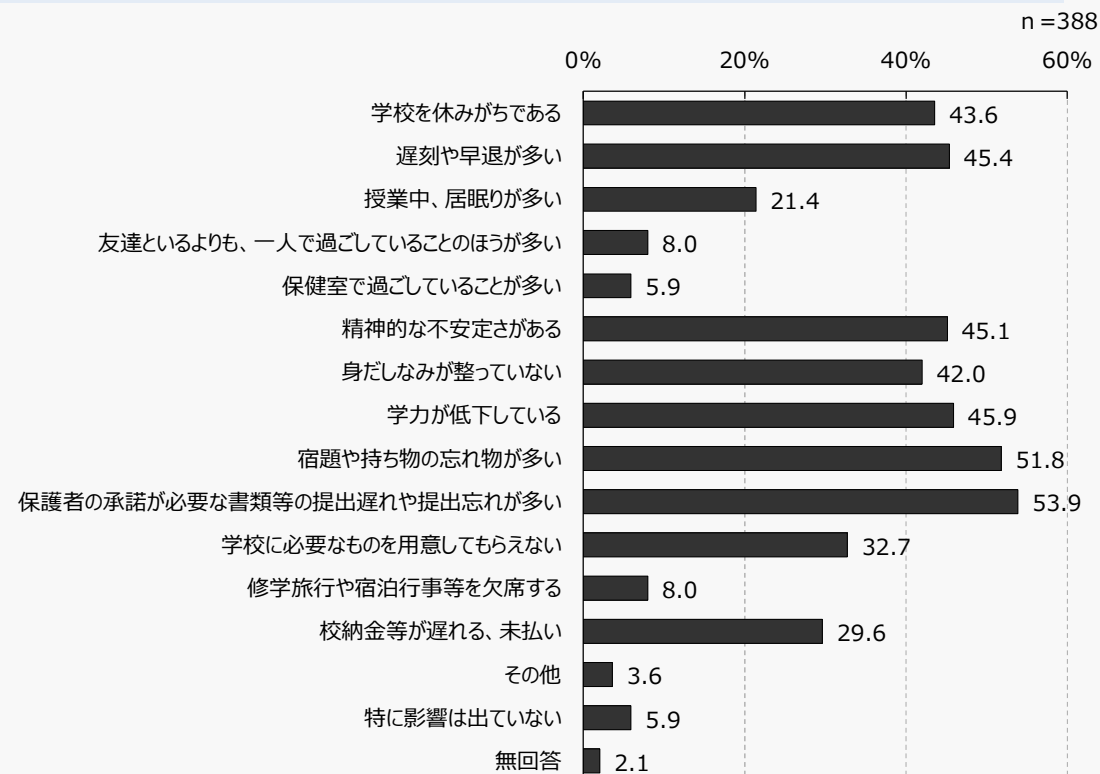
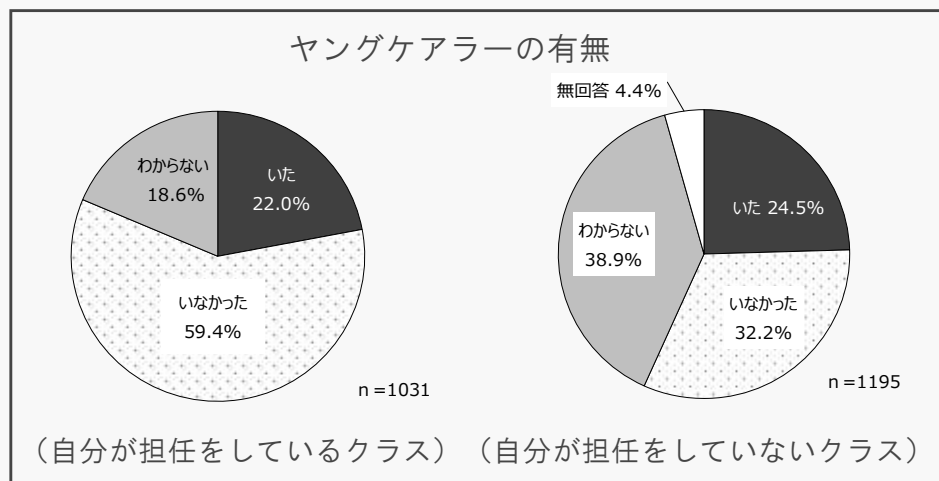


①学校関係者向けアンケート調査

過去に関わっていた子どもについて

過去に、担任をしていたクラスにヤングケアラーと思われる子どもが「いた」と回答した割合は22.0%、担任をしていないクラスにヤングケアラーと思われる子どもが「いた」と回答した割合は24.5%となっている。

ヤングケアラーと思われる子どもが「いた」と回答した人に、その子どもに出ていた学校生活の影響を聞いたところ、「保護者の承諾が必要な書類等の提出遅れや提出忘れが多い」が最も多く、次いで「宿題や持ち物の忘れ物が多い」、「学力が低下している」となっている。

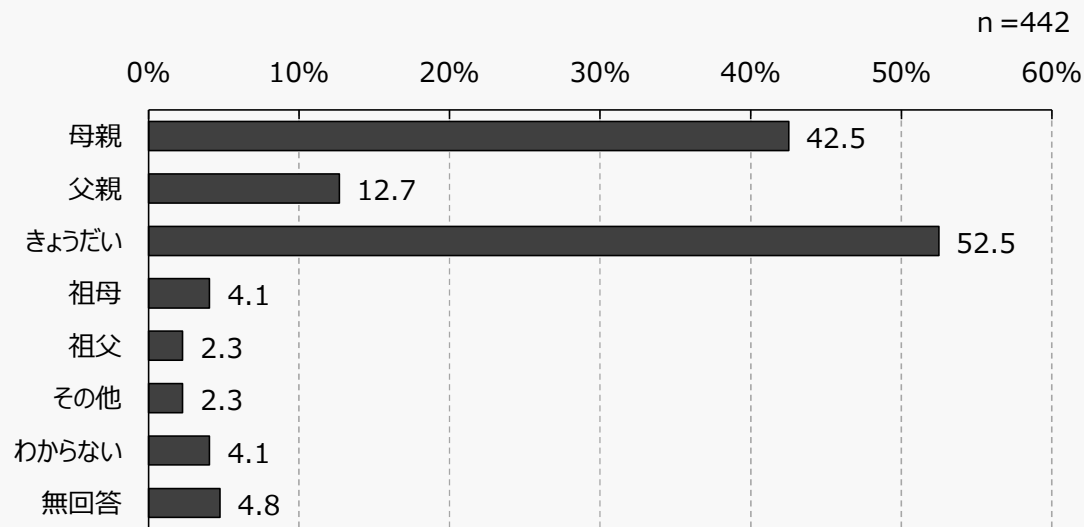


①学校関係者向けアンケート調査

最も印象に残っている子どもについて（ケアを必要としている人）

ヤングケアラーと思われる子どもがいる（いた）と回答した人に最も印象に残っている子どもについて聞いたところ、442人から回答があった。

ケアを必要としている人は誰かを聞いたところ、「きょうだい」が最も多く、次いで「母親」、「父親」となっている。また、「母親」と「きょうだい」や「母親」「父親」と「きょうだい」など複数の家族をケアしている子どももみられた。



その他の主な回答

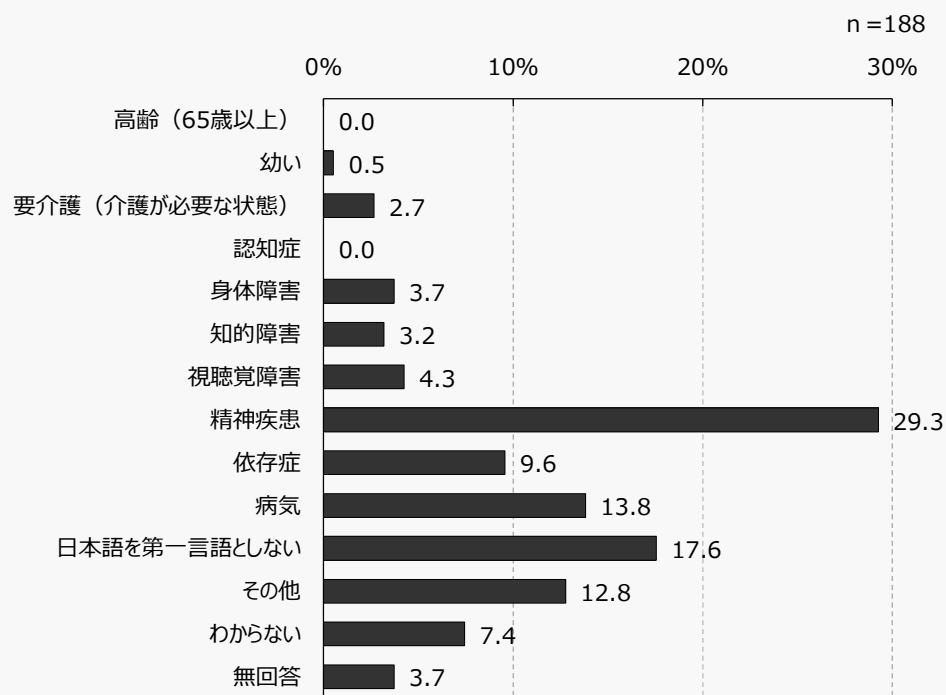
・甥 ・姪 ・従姉妹 ・おじ ・親戚

①学校関係者向けアンケート調査

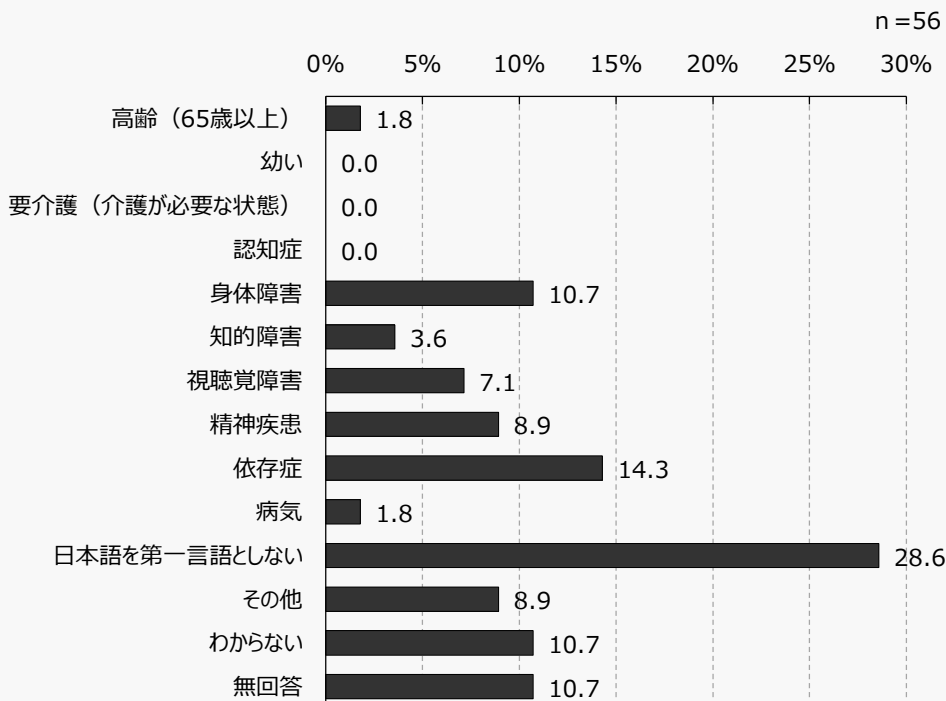
最も印象に残っている子どもについて（ケアを必要としている母親・父親の状態）

ケアが必要な母親の状態は、「精神疾患」が最も多く、次いで「日本語を第一言語としない」、「病気」となっている。

ケアが必要な父親の状態は、「日本語を第一言語としない」が最も多く、次いで「依存症」、「身体障害」となっている。



(ケアが必要な母親の状態)

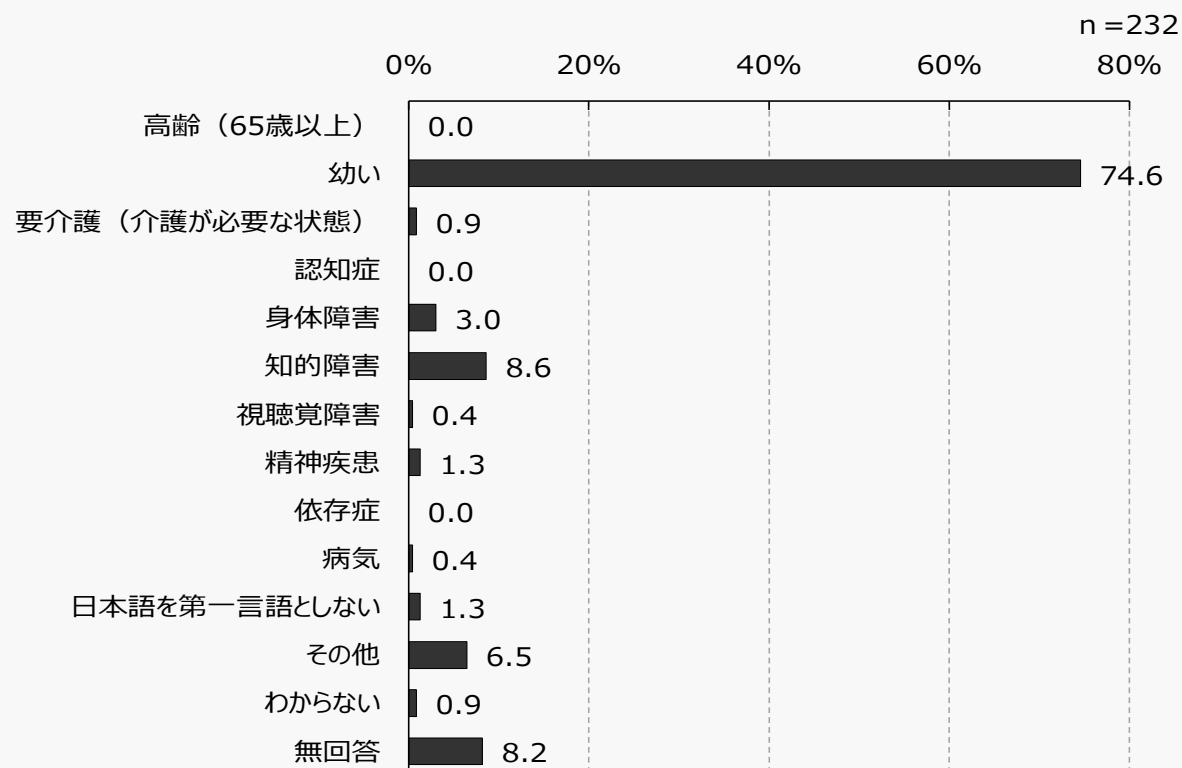


(ケアが必要な父親の状態)

①学校関係者向けアンケート調査

最も印象に残っている子どもについて（ケアを必要としているきょうだいの状態）

ケアが必要なきょうだいの状態は、「幼い」が最も多く、次いで「知的障害」、「身体障害」となっている。

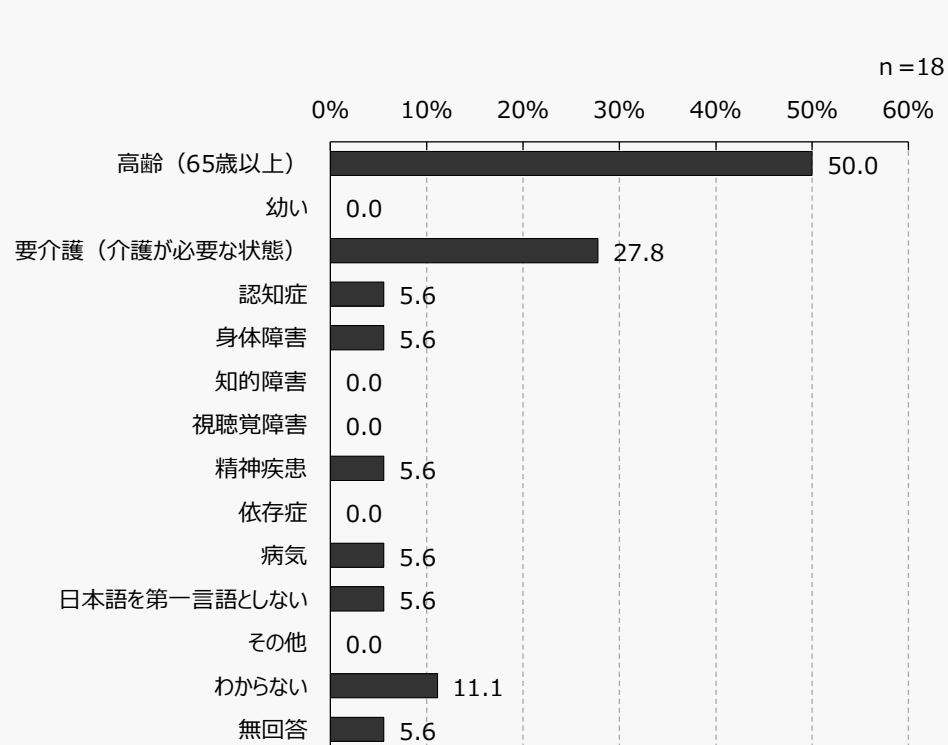


（ケアが必要なきょうだいの状態）

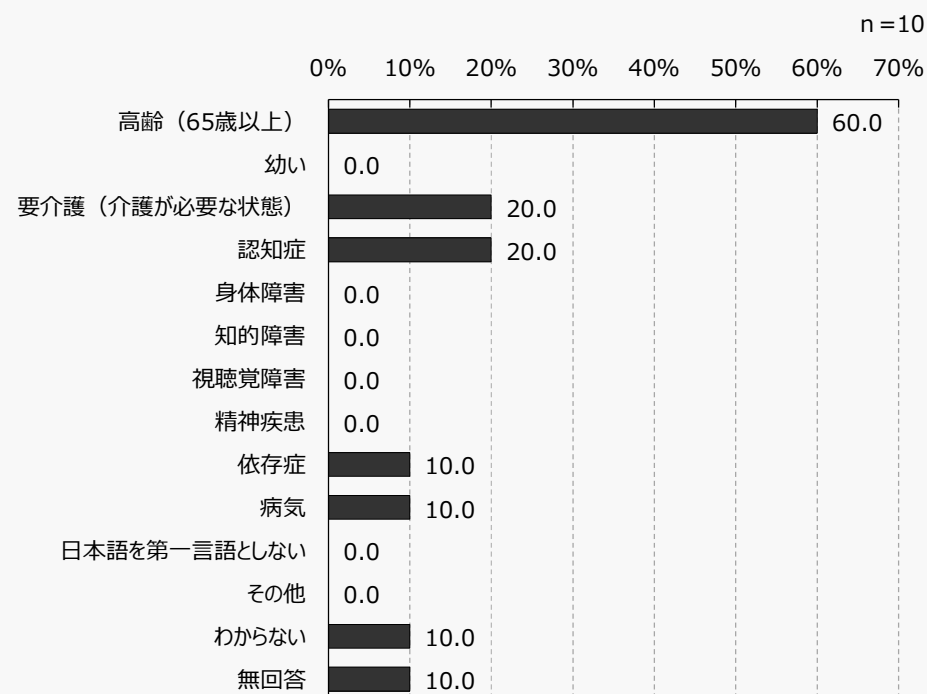
①学校関係者向けアンケート調査

最も印象に残っている子どもについて（ケアを必要としている祖母・祖父の状態）

ケアが必要な祖母・祖父の状態は、どちらも「高齢（65歳以上）」が最も多く、次いで「要介護（介護が必要な状態）」、「認知症」等となっている。



（ケアが必要な祖母の状態）

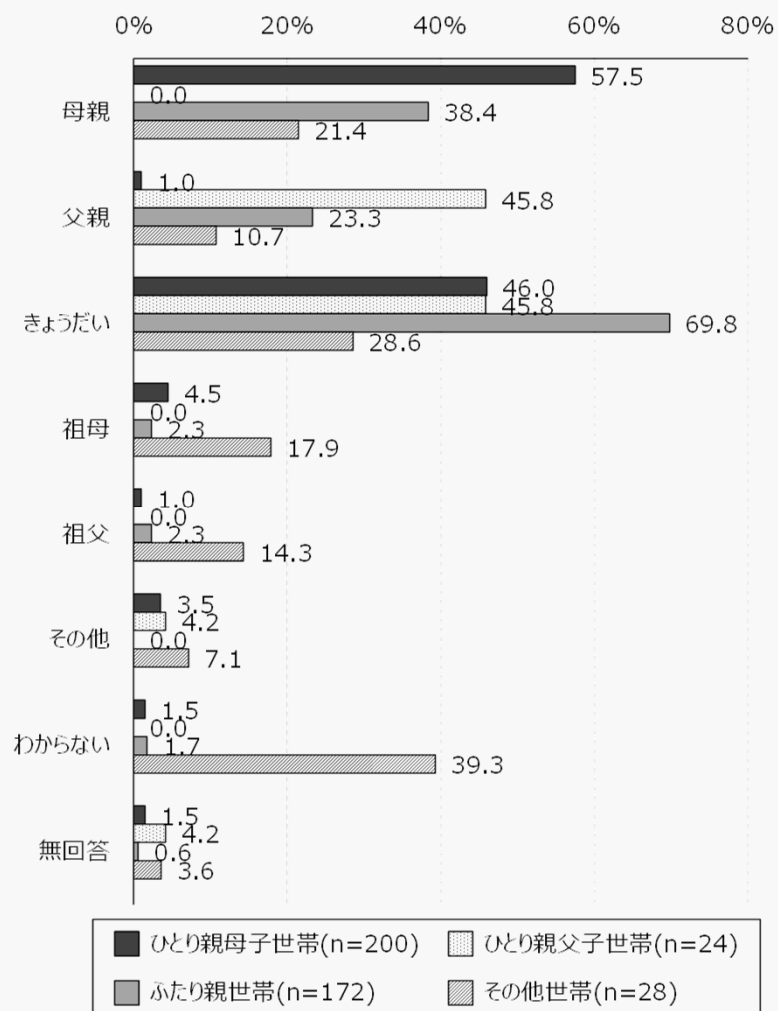


（ケアが必要な祖父の状態）

①学校関係者向けアンケート調査

最も印象に残っている子どもについて（世帯構成別ケアを必要としている人）

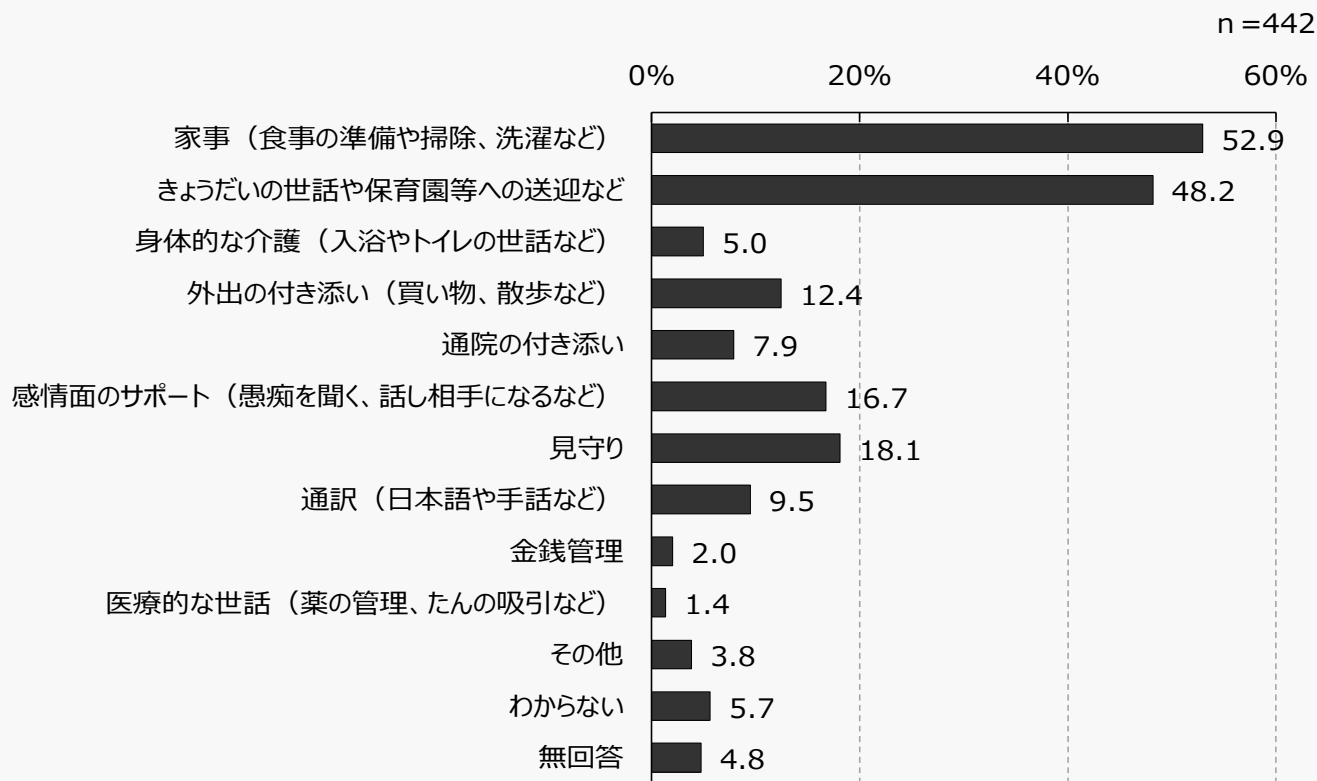
ケアを必要としている人を世帯構成別にみると、ひとり親世帯（母子）では、「母親」の割合が高く、ふたり親世帯では、「きょうだい」の割合が高くなっている。



①学校関係者向けアンケート調査

最も印象に残っている子どもについて（ケアの内容）

子どもがしている（していた）ケアの内容については、「家事（食事の準備や掃除、洗濯など）」が最も多く、次いで「きょうだいの世話や保育園等への送迎など」、「見守り」となっている。



①学校関係者向けアンケート調査

最も印象に残っている子どもについて（学年別ケアの内容）

子どもがしている（していた）ケアの内容を学年別にみると、「きょうだいの世話や保育園等への送迎など」は各学年とも約5割の子どもが行っており、「家事（食事の準備や掃除、洗濯など）」などほとんどのケアの内容は学年が上がるにつれ割合が高くなる傾向がみられた。



①学校関係者向けアンケート調査

最も印象に残っている子どもについて（ケアをしていることに気づいたきっかけ）

子どもがケアをしていることに気づいたきっかけについて、388人から回答があった。

子どもとの会話から

日常会話から。
保健室に来て、相談をしていた。

関係機関からの引継ぎから

進級時や転校時の申し送りに記載があった。
兄弟と関わっている外部からの話。

家庭訪問・面談から

家庭訪問で家族の状況を知った。
三者面談で子どもが通訳をしていた。
個人面談で母とコミュニケーションが取れない。

保護者や家族から

きょうだいの面倒を見るため、早退させていた。
保護者からの相談。

学校生活への影響から

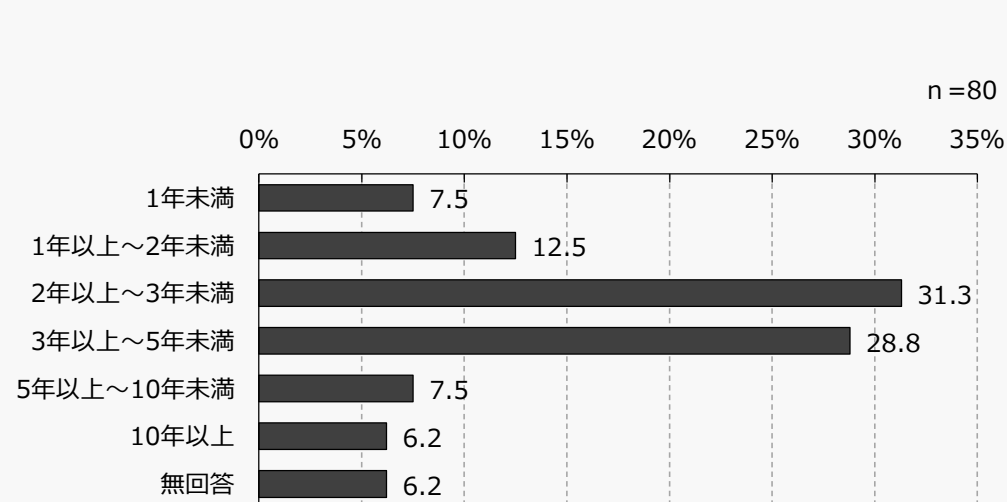
遅刻や欠席が多く、子どもから理由を聞いた。
忘れ物が多く書類が提出されなかった。

①学校関係者向けアンケート調査

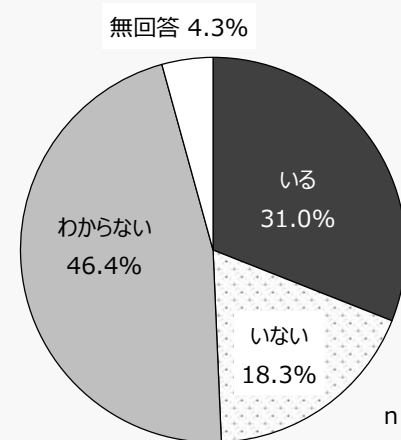
最も印象に残っている子どもについて（ケアの期間・支援者）

子どもが行っているケアの期間を知っていると回答した人にその期間を聞いたところ、「2年以上～3年未満」が最も多く、次いで「3年以上～5年未満」、「1年以上～2年未満」となっている。

ケアをしている子どものほかに家族を支援している人がいる（いた）かについては、「いる」が31.0%、「わからない」が46.4%、「いない」が18.3%となっている。



(ケアをしている期間)



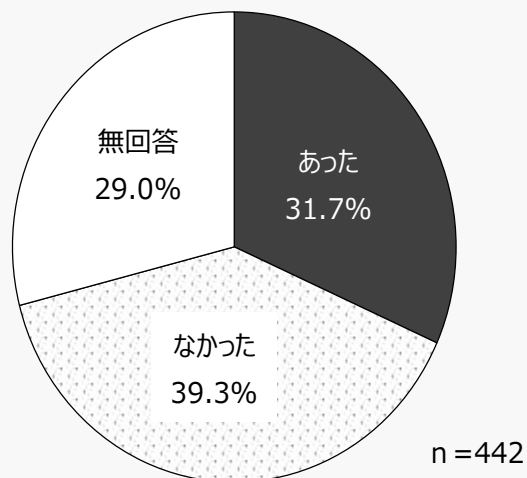
(児童・生徒以外の支援者)

「いる」の内訳
家族・親戚、民生・児童委員
子ども家庭支援センター、
HEARTS、児童相談所、学校 等

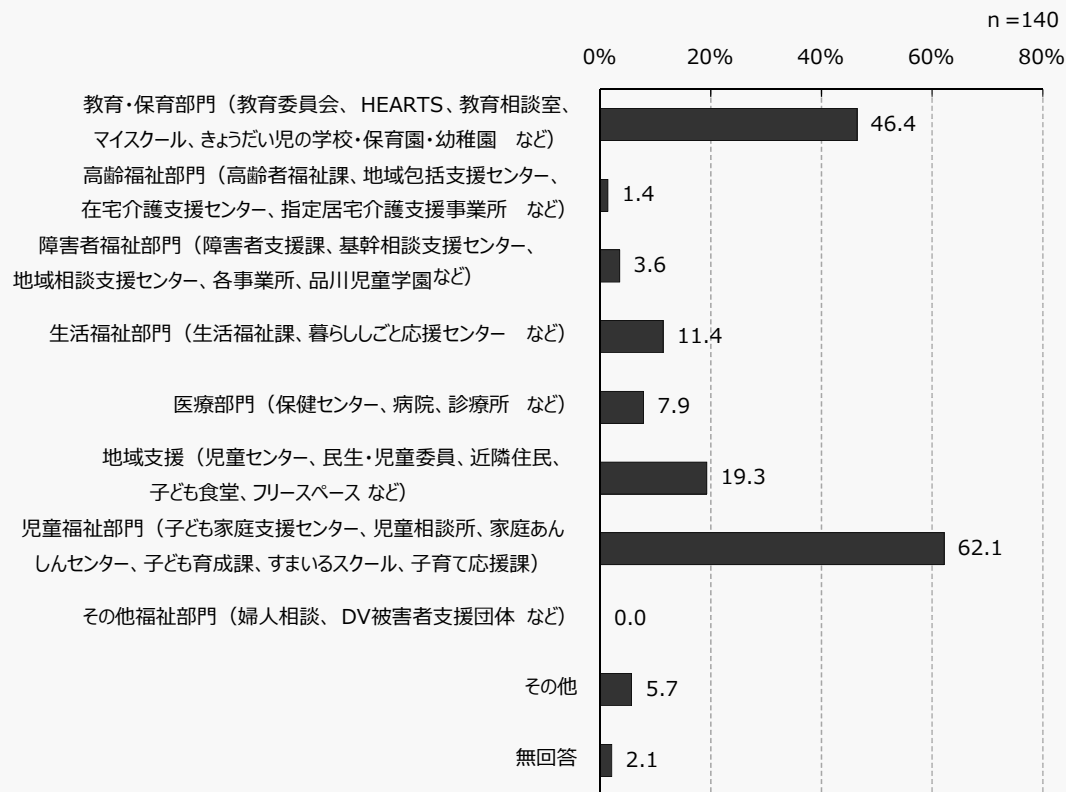
①学校関係者向けアンケート調査

最も印象に残っている子どもについて（対応時の連携）

学校以外の機関との連携が「あった」と回答した人にどのような機関と連携があったかを聞いたところ、「児童福祉部門」が最も多く、次いで「教育・保育部門」、「地域支援」となっている。



（学校以外の機関との連携の有無）



（学校以外の連携先）

①学校関係者向けアンケート調査

最も印象に残っている子どもについて（関わる上で、困ったこと・苦労したこと）

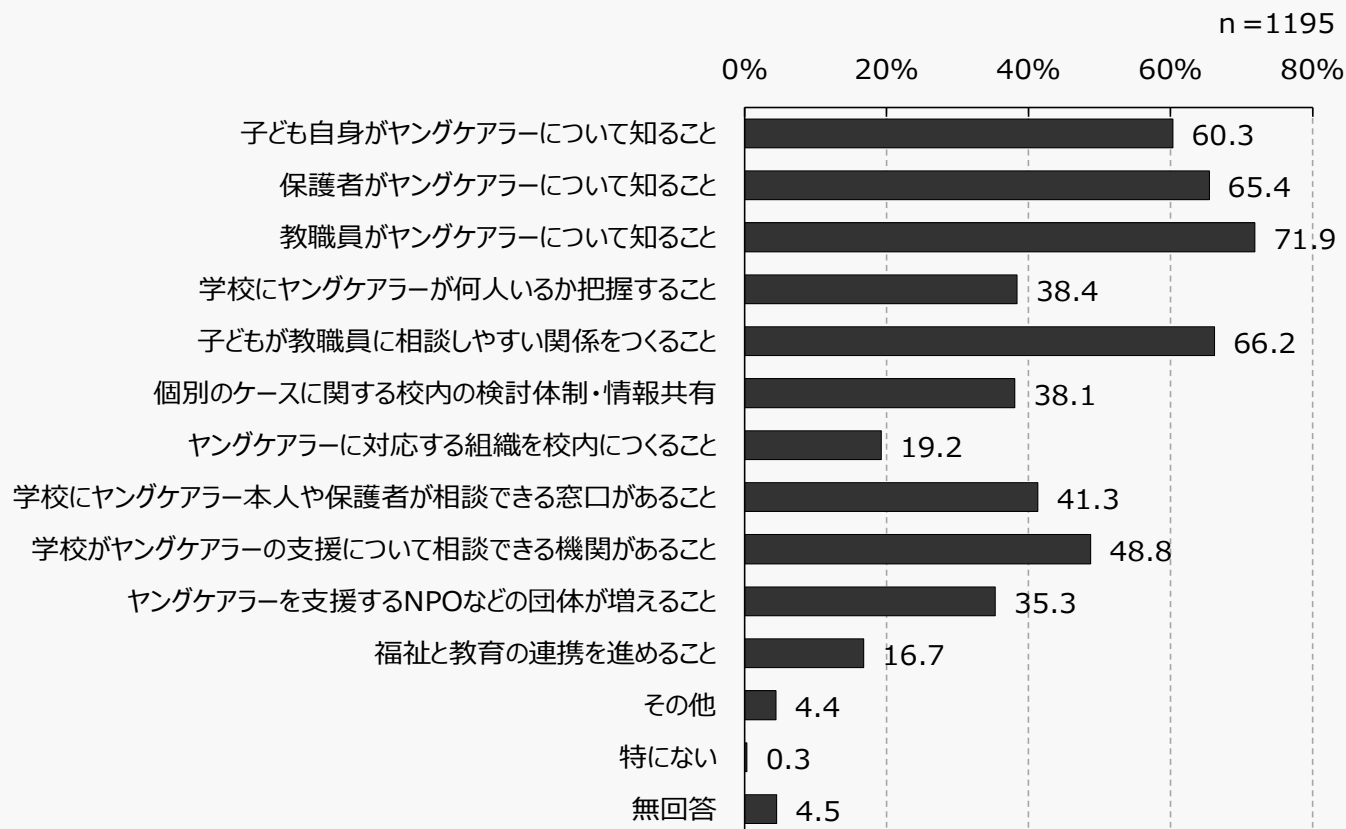
子どもと関わる上で困ったこと、苦労したことについて、182人から回答があった。

- 本人がなかなか状況を伝えようとしない。心配してほしくないと感じているようで介入しづらい。どこまで助けられるかわからないのに気軽に踏み込めない。
- 家庭の中のことには踏み込んでほしくない雰囲気があり、あまり話すことができなかった。
- 今は、学校に何でも話してくれているが、壁を作られないように意識している。
- 困っていることを自覚していない。
- 保護者と連絡が取れなかった。
- 日本語でのコミュニケーションがとれなかった。
- 保護者の理解や協力が得られなかった。
- 生徒本人と信頼関係が持てても、そのことに対し、保護者が悪く捉えてしまい、関係性が持てなかった。
- 家庭訪問で玄関先までしか入れなかった。
- 家庭のことなので、どこまで介入していいのかそのラインがわからなかった。
- 金銭面は、どうにもならなかった。

①学校関係者向けアンケート調査

ヤングケアラー支援に必要だと思うこと

ヤングケアラーを支援するために、必要だと思うことについては、「教職員がヤングケアラーについて知ること」が最も多く、次いで「子どもが教職員に相談しやすい関係をつくること」が、「保護者がヤングケアラーについて知ること」となっている。



①学校関係者向けアンケート調査

ヤングケアラー支援について教職員にできること

教職員としてできると思うサポート、役立つと思う支援について、754人から回答があった。

本人・保護者へのサポート

声をかける。話を聞いてあげる。いつでも相談にのることを伝える。
子どもの状況を把握する。話をできる環境を作る。
休み時間や放課後に補習を行う。宿題や各教科の課題のサポート。
子ども自身が、自分自身の状況について情報を知る機会を提供する。
保護者と共有し、保護者にも意識を持ってもらう。
子どもらしく生活できる環境を整える。
通訳ソフトの無料貸出や通訳同席での面談システムの充実。

関係機関との連携

本人や保護者が安心して相談できる場の提供。
公的なものだけでなく、民間の事業や施設との連携。
家庭を支える対策をとる。
他機関と連携を取りながら、サポートしていく。

校内での支援

ヤングケアラーについての知識を得ること。
校内での情報共有。共通理解。
学校内で、話しやすい環境づくり。

学校での対応の限界

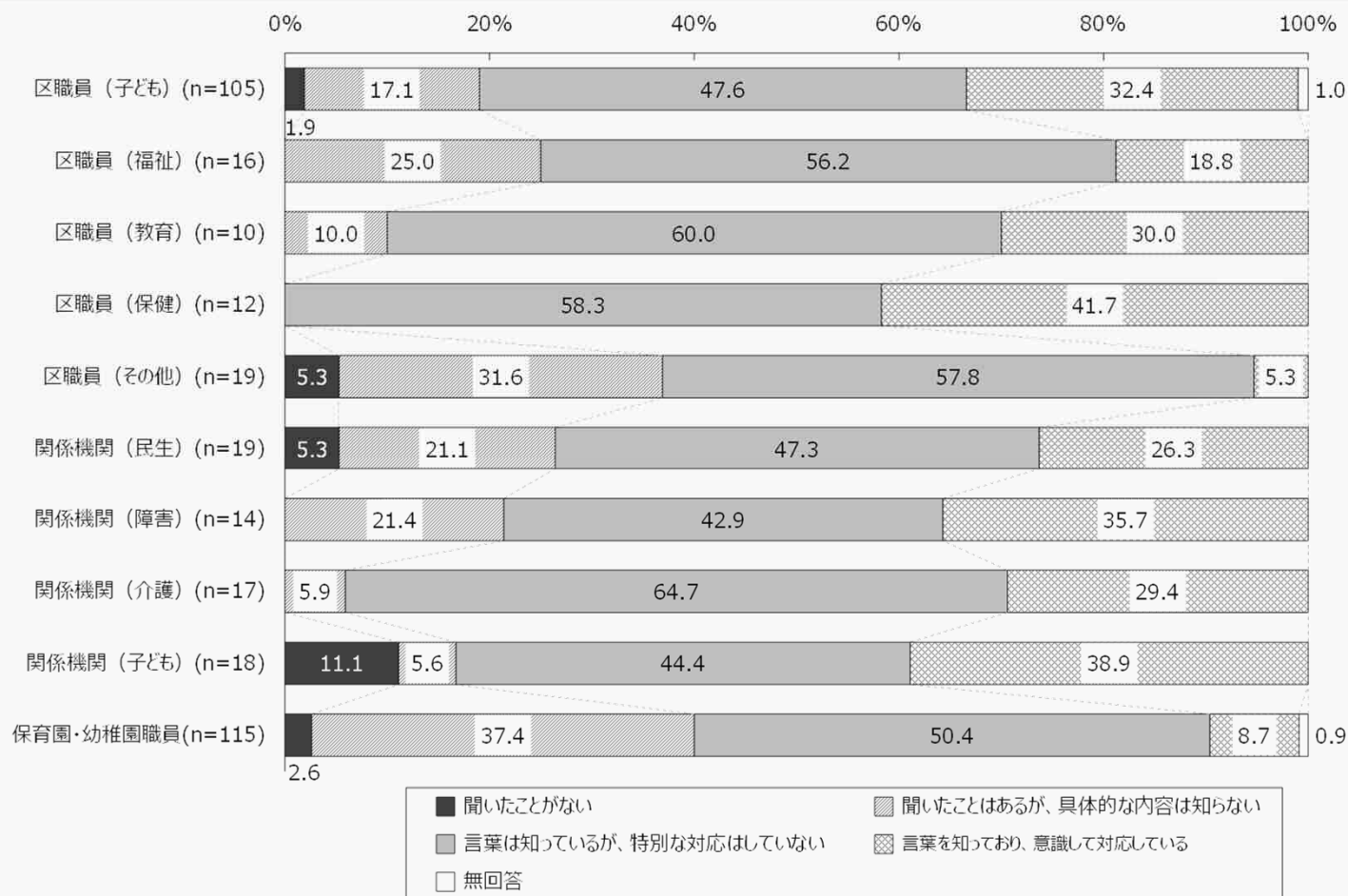
学校が家庭に介入するのには限界があり、すべきではない。
多忙すぎて、学校での対応は現状不可能。
教員にサポートはできない。福祉でサポートできる体制を作るべき。

②関係機関職員向けアンケート調査

②関係機関職員向けアンケート調査

回答者の職名別認知度について

ヤングケアラーの認知について所属別にみると、「言葉を知っており、意識して対応している」と回答した割合は、区職員（保健）、関係機関（子ども）で約4割となっている。一方、「聞いたことがない」と回答した割合が、関係機関（子ども）が11.1%、区職員（その他）及び関係機関（民生）の5.3%となっている。また、保育園・幼稚園職員の37.4%、区職員（その他）の31.6%が「聞いたことはあるが、具体的な内容は知らない」と回答している。

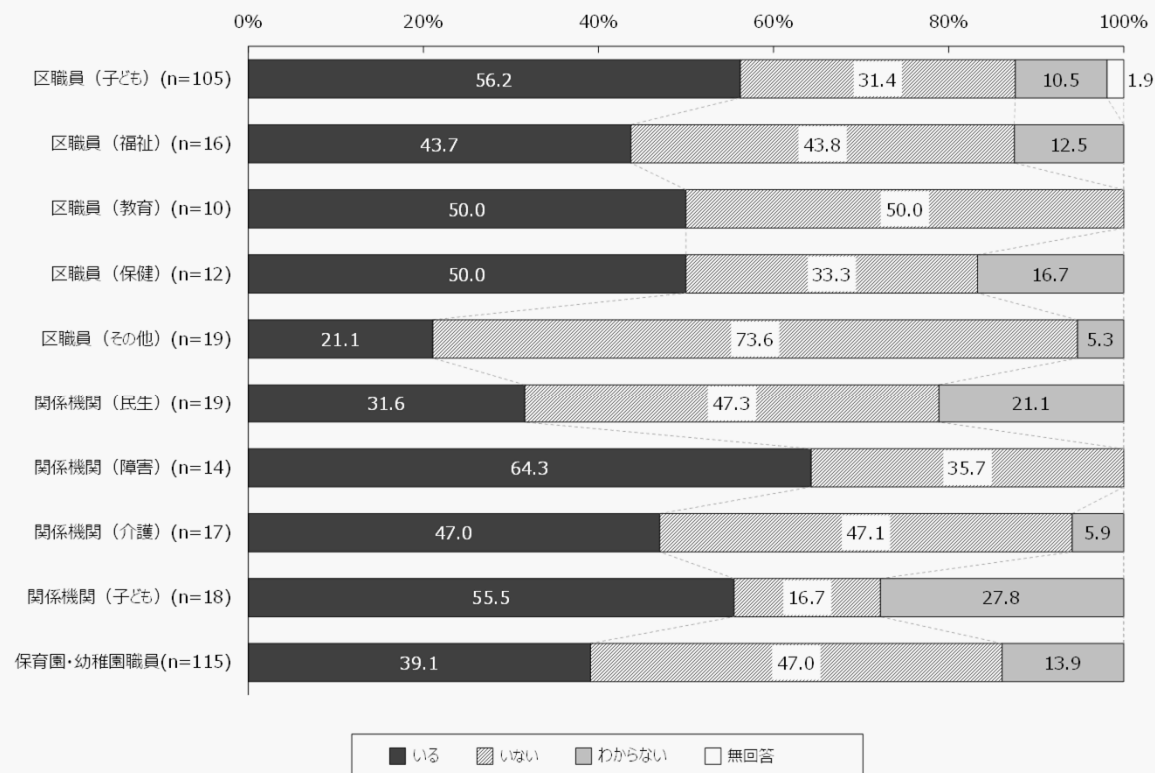
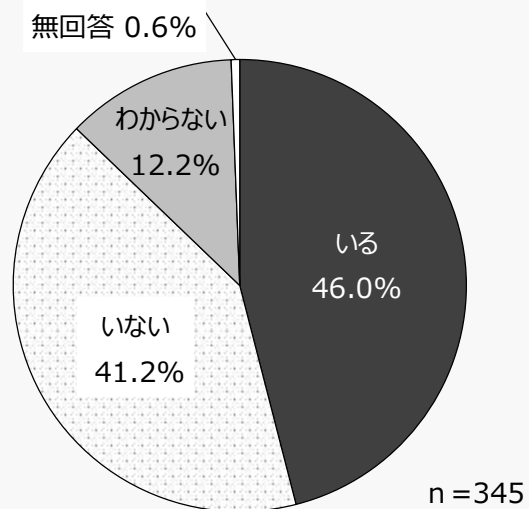


②関係機関職員向けアンケート調査

今まで関わった家庭について

今まで関わった家庭の中に、ヤングケアラーと思われる子どもがいたかについては、「いる」が46.0%、「いない」が41.2%となっている。

今まで関わった家庭の中に、ヤングケアラーと思われる子どもがいたかについて所属別にみると、関係機関（障害）の64.3%、区職員（子ども）の56.2%、関係機関（子ども）の55.5%が「いる」と回答している。



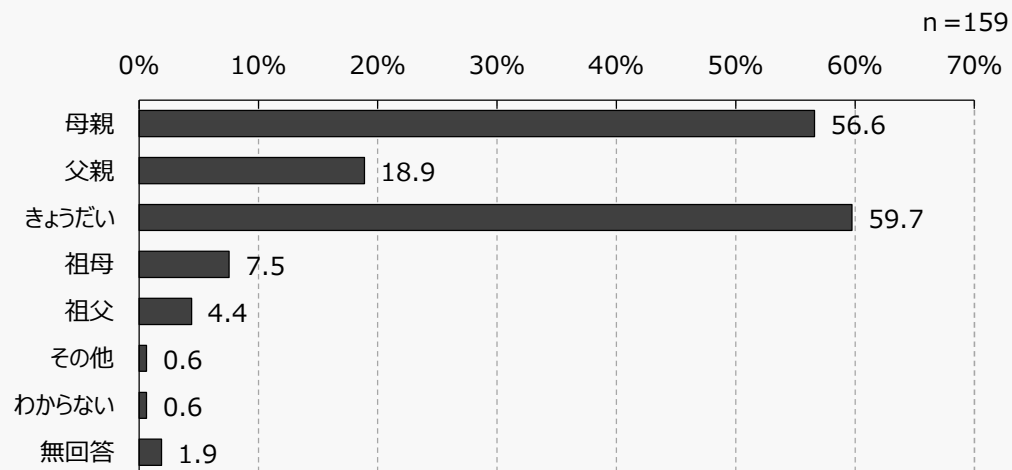
②関係機関職員向けアンケート調査

最も印象に残っている子どもについて（ケアを必要としている人）

ヤングケアラーと思われる子どもがいる（いた）と回答した人に最も印象に残っている子どもについて聞いたところ、159人から回答があった。

ケアを必要としている人は誰かを聞いたところ、「きょうだい」が最も多く、次いで「母親」、「父親」となっている。

また、「母親」と「きょうだい」や「両親」と「きょうだい」、「両親」と「祖父母」など複数の家族をケアしている子どももみられた。



その他の主な回答

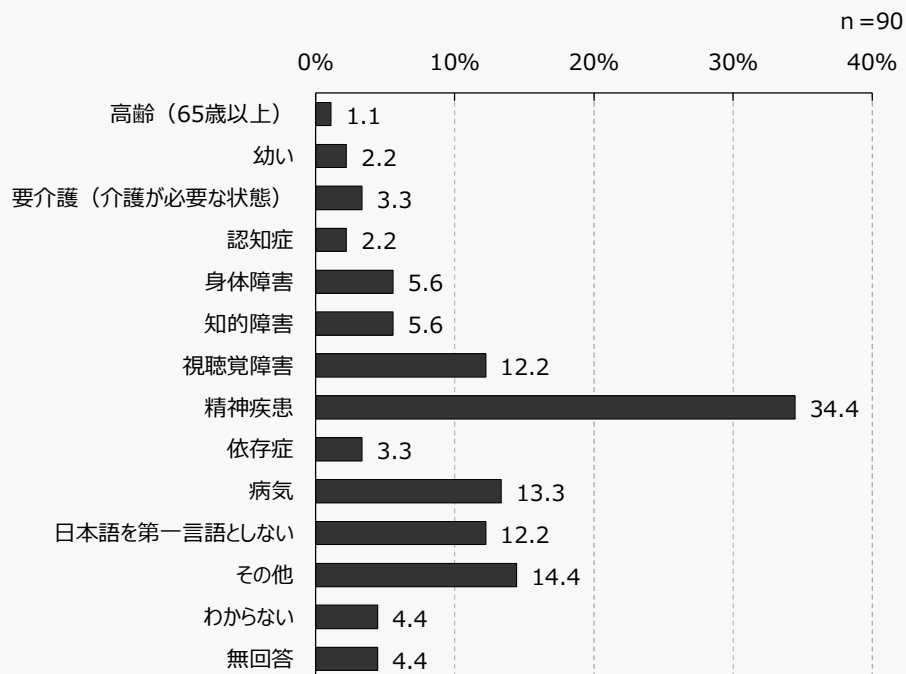
・おじ

②関係機関職員向けアンケート調査

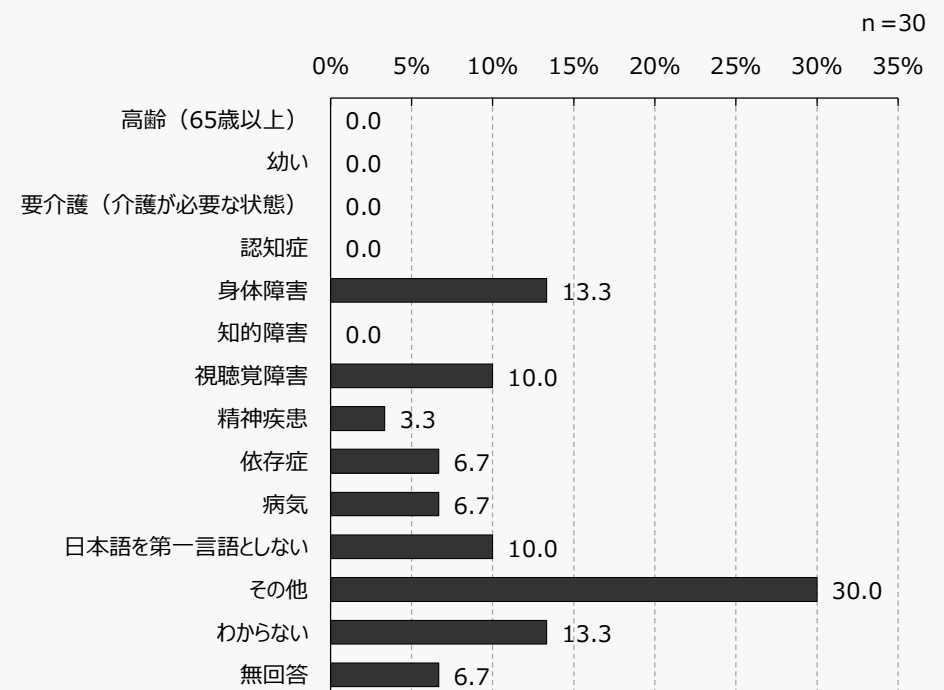
最も印象に残っている子どもについて（ケアを必要としている母親・父親の状態）

ケアが必要な母親の状態は、「精神疾患」が最も多く、次いで「病気」、「視聴覚障害」「日本語を第一言語としない」となっている。

ケアが必要な父親の状態は、「身体障害」や「視聴覚障害」及び「日本語を第一言語としない」が多くなっている。



（ケアが必要な母親の状態）

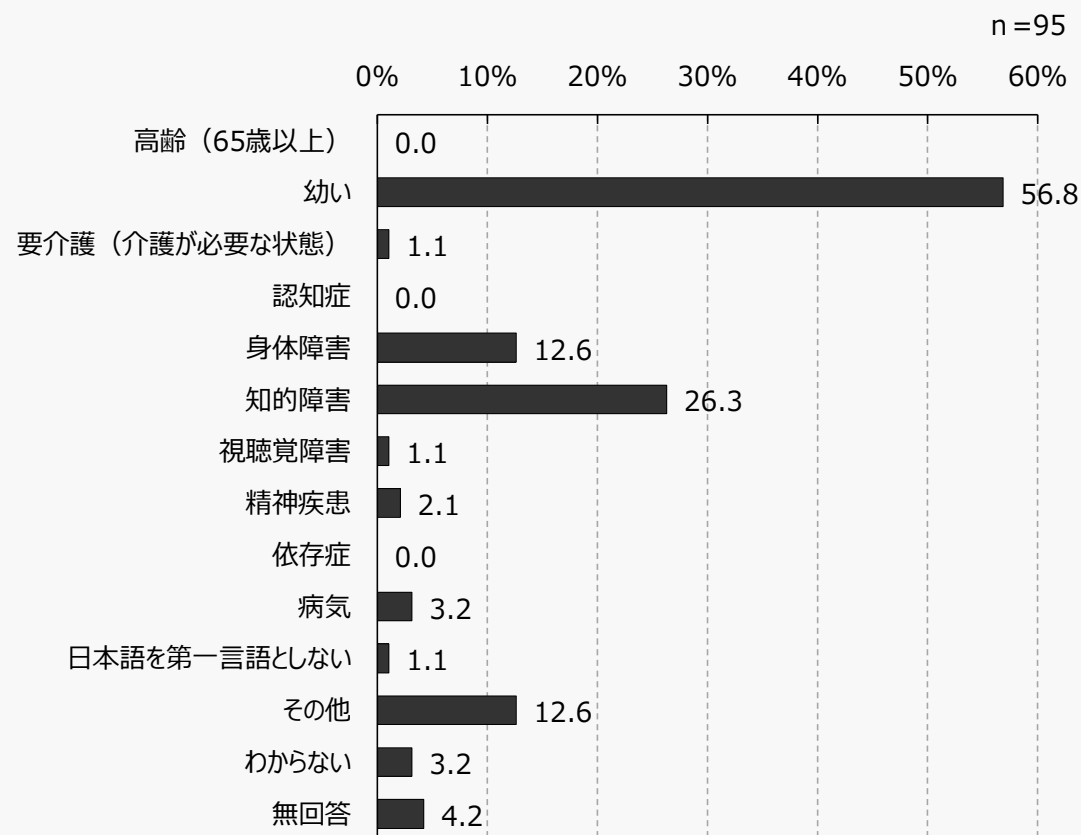


（ケアが必要な父親の状態）

②関係機関職員向けアンケート調査

最も印象に残っている子どもについて（ケアを必要としているきょうだいの状態）

ケアが必要なきょうだいの状態は、「若い」が最も多く、次いで「知的障害」、「身体障害」となっている。



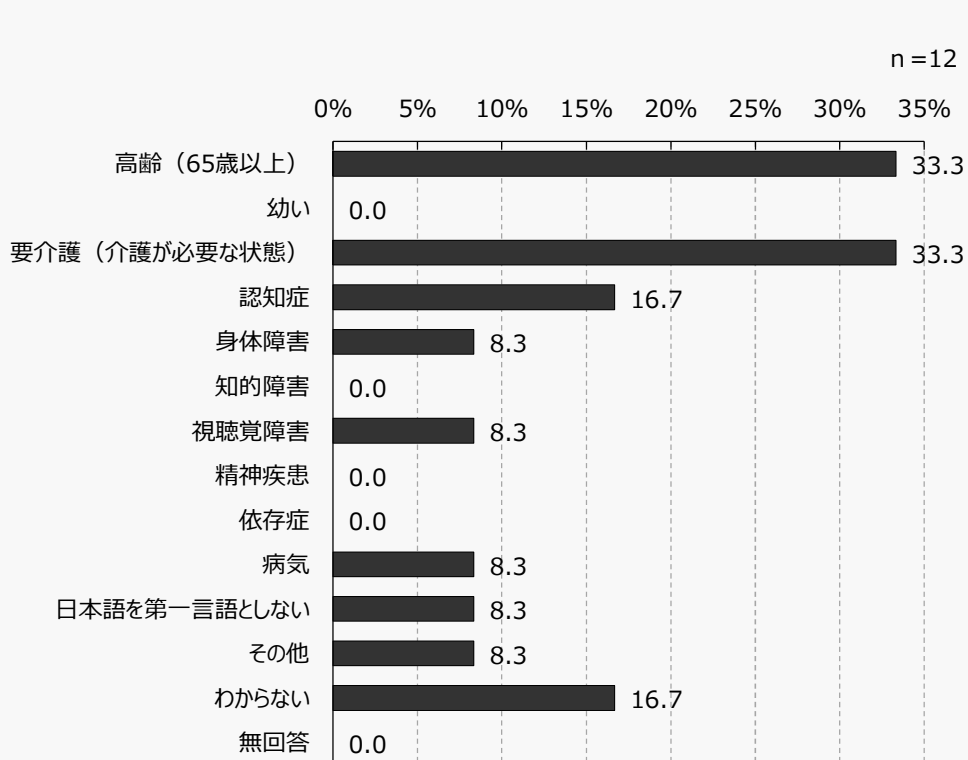
（ケアが必要なきょうだいの状態）

②関係機関職員向けアンケート調査

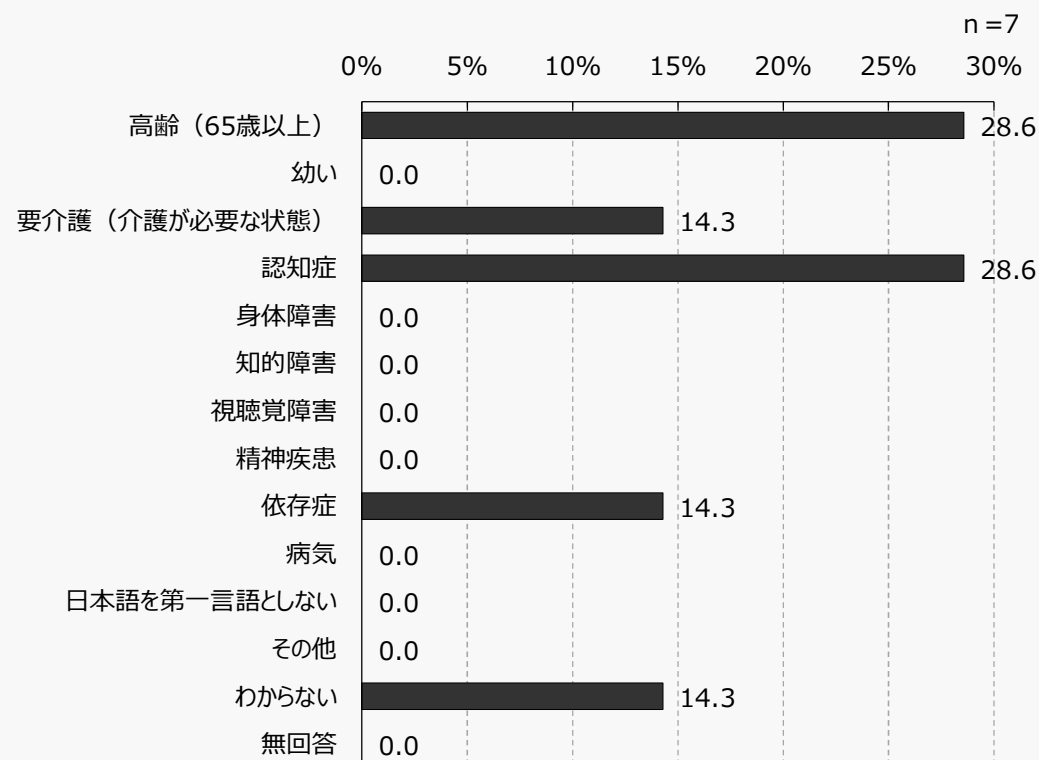
最も印象に残っている子どもについて（ケアを必要としている祖母・祖父の状態）

ケアが必要な祖母の状態は、「高齢（65歳以上）」及び「要介護（介護が必要な状態）」が最も高く、次いで「認知症」となっている。

ケアが必要な祖父の状態は、「高齢（65歳以上）」及び「認知症」が最も高く、次いで、「要介護（介護が必要な状態）」、「依存症」が同率となっている。



（ケアが必要な祖母の状態）

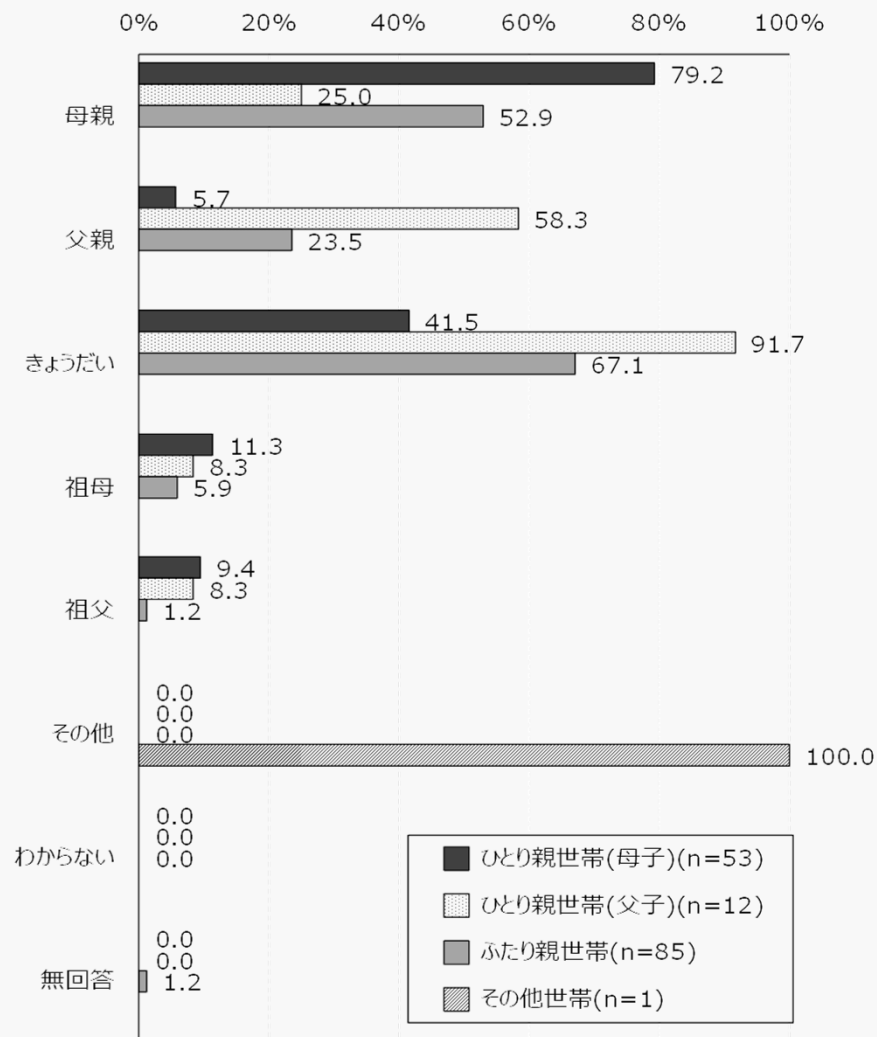


（ケアが必要な祖父の状態）

②関係機関職員向けアンケート調査

最も印象に残っている子どもについて（世帯構成別ケアを必要としている人）

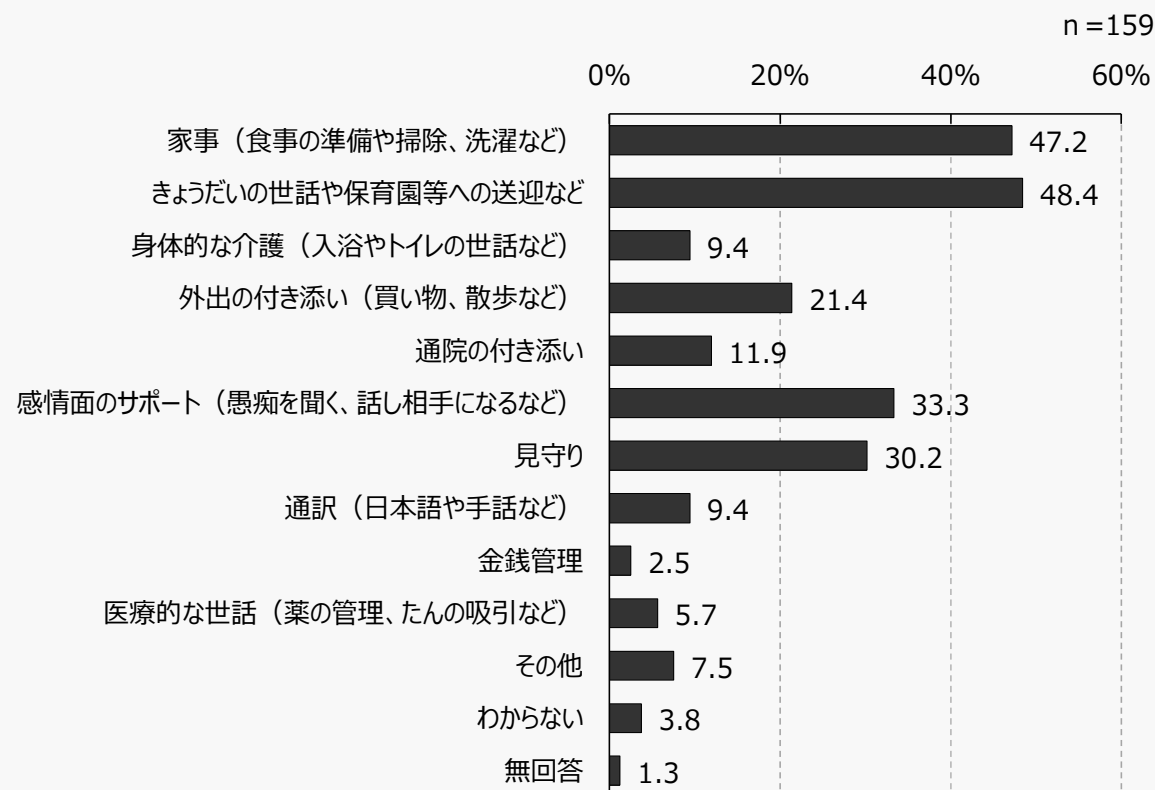
ケアを必要としている人を世帯構成別にみると、ひとり親世帯（母子）では「母親」の割合が約8割と高く、ひとり親世帯（父子）及びふたり親世帯では「きょうだい」の割合が高くなっている。



②関係機関職員向けアンケート調査

最も印象に残っている子どもについて（ケアの内容）

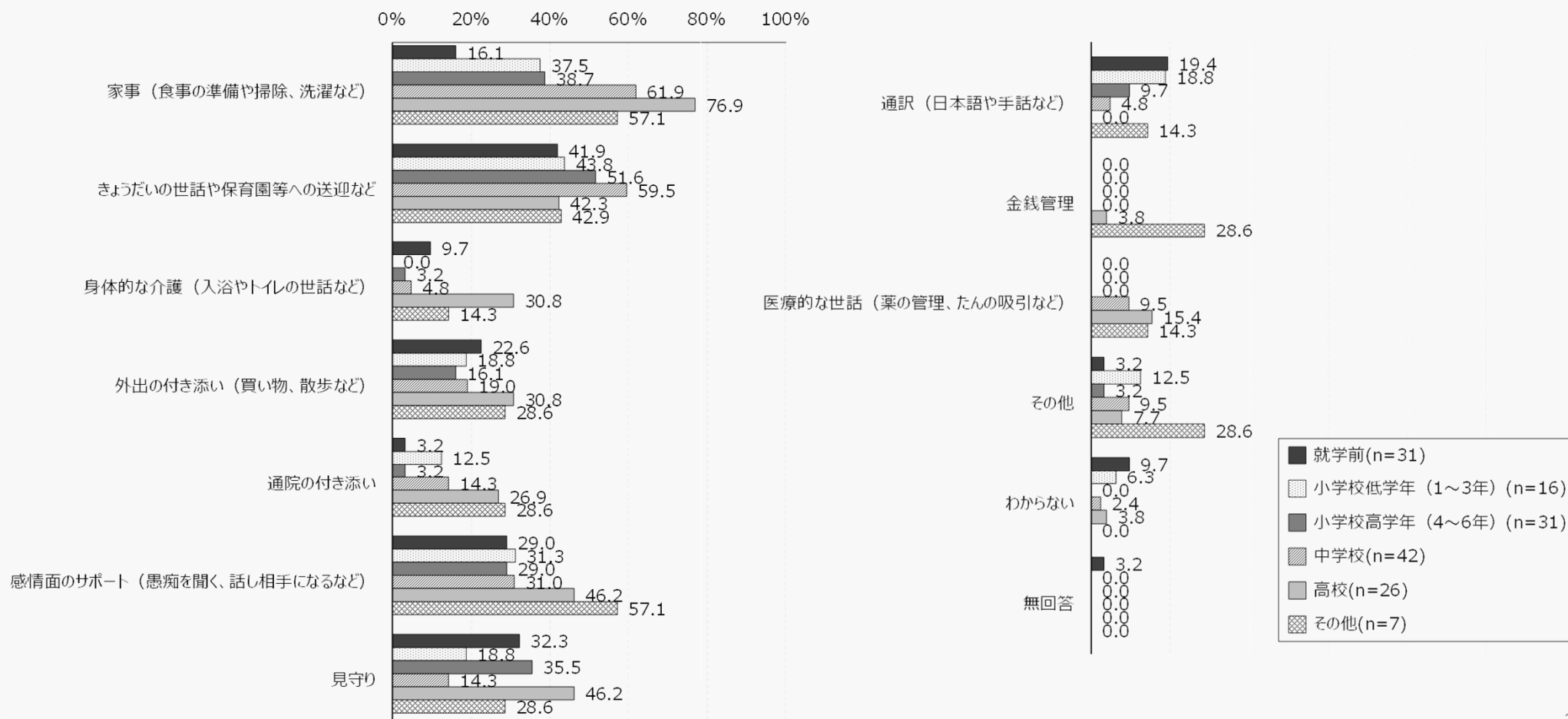
子どもが行っている（行っていた）ケアの内容については、「きょうだいの世話や保育園等への送迎など」が最も多く、次いで「家事（食事の準備や掃除、洗濯など）」、「感情面のサポート（愚痴を聞く、話し相手になるなど）」となっている。



②関係機関職員向けアンケート調査

最も印象に残っている子どもについて（学年別ケアの内容）

子どもが行っている（行っていた）ケアの内容を学年別にみると、「きょうだいの世話や保育園等への送迎など」はいずれの学年も4割を超えており、中学生では約6割が行っている。「家事（食事の準備や掃除、洗濯など）」は就学前から高校生に至るまで年齢が上がるにつれ、割合が高くなる傾向がみられる。また、「感情面のサポート（愚痴を聞く、話し相手になるなど）」は就学前や小学校低学年でも約3割がケアをしていると回答している。



②関係機関職員向けアンケート調査

最も印象に残っている子どもについて（ケアをしていることに気づいたきっかけ）

子どもがケアをしていることに気づいたきっかけについて、149人から回答があった。

子どもとの会話から

本人と面談をした際に気づいた。
子どもから生活の話を聞いている中で気づいた。

日常生活の中で

保育園でお迎え時に自分の支度と弟たちの支度をしていた。
父母と日本語で会話が出来ず、通訳をその子が行っていた。

他機関から

各関係機関からの情報提供。
アセスメントやケース記録に「支援者」として記載されていた。

相談・支援の際に

窓口と同席して、こちらの説明を母親に通訳していた。
母の支援で介入して把握した。
高齢者のサービス導入の際に把握した。

保護者や家族から

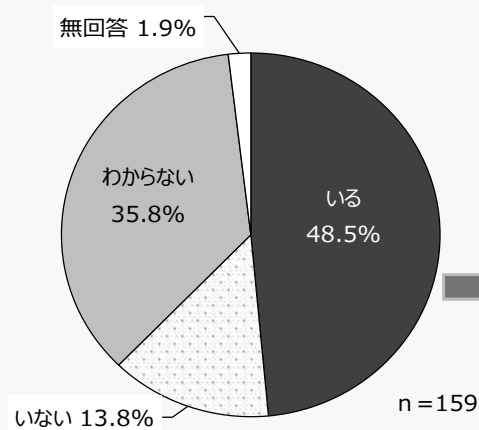
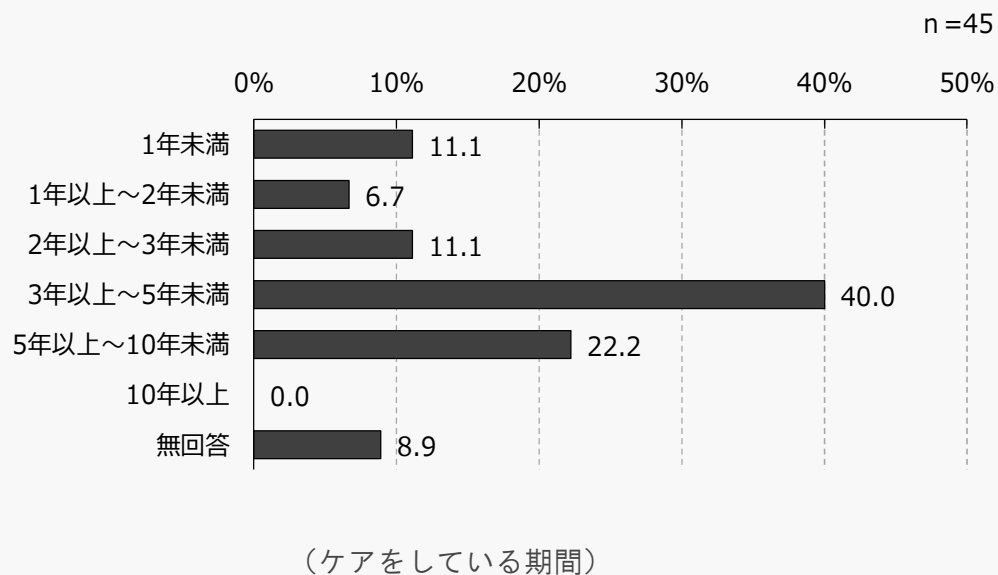
保護者（母親）が、兄の介助・世話をしていることを話してくれた。
保護者への聞き取りの中で、兄の学校生活が制限されるほどのケア負担が挙げられた。

②関係機関職員向けアンケート調査

最も印象に残っている子どもについて（ケアの期間・支援者）

子どもが行っているケアの期間を「知っている」と回答した人にその期間を聞いたところ、「3年以上～5年未満」が最も多く、次いで「5年以上～10年未満」、「1年未満」及び「2年以上～3年未満」となっている。

ケアをしている子どものほかに家族を支援している人がいる（いた）かについては、「いる」が48.5%、「わからない」が35.8%、「いない」が13.8%となっている。



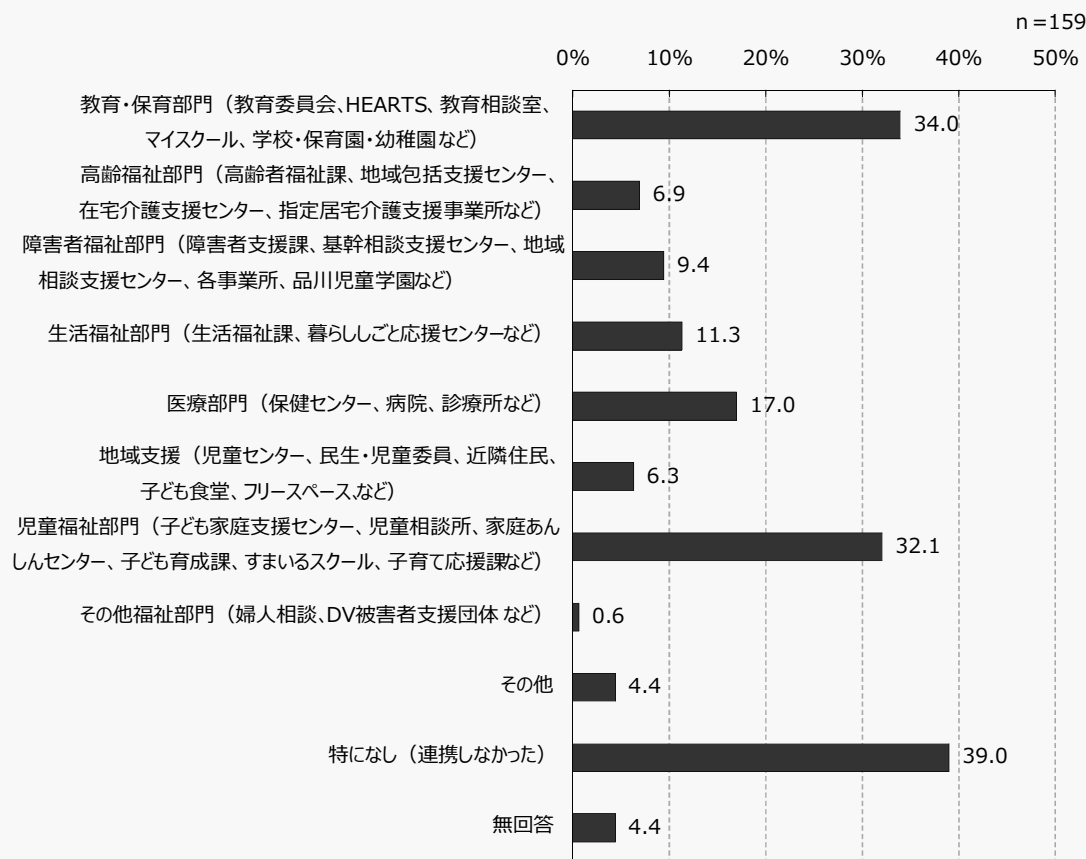
「いる」の内訳
家族・親戚、介護保険サービス
子ども家庭支援センター、
訪問看護、訪問介護、
児童相談所、学校
民生・児童委員 等

(子ども以外の支援者)

②関係機関職員向けアンケート調査

ヤングケアラー支援における他機関との連携について

これまで関わった家庭の中にヤングケアラーと思われる子どもがいると回答した人に、連携した機関について聞いたところ、「特になし（連携しなかった）」が最も多く、次いで「教育・保育部門」、「児童福祉部門」、となっている。



②関係機関職員向けアンケート調査

連携する上で、最も効果的な支援について

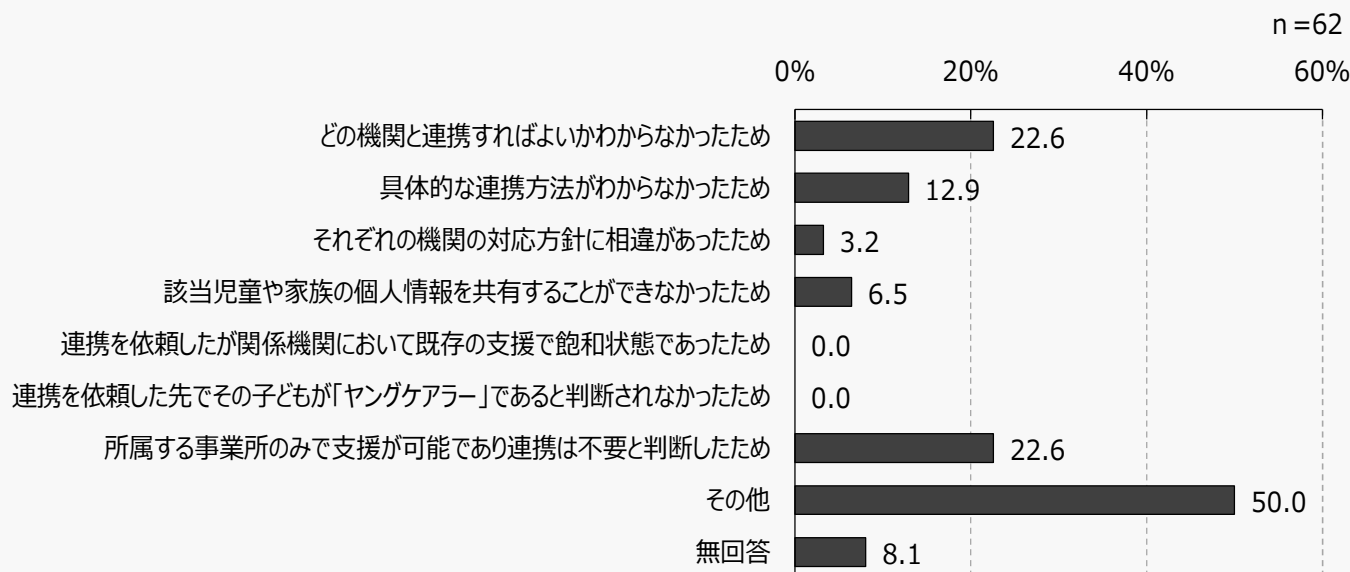
最も効果的な支援が行えたケースについて、62人から回答があった。

- 要保護児童対策地域協議会で、様々な部門の支援者と一堂に会して話げできた。
- ケアラーの子がポジティブでいられる児童センターの文化活動。
- 学校との情報共有、定期面談。
- 金銭面の困窮があり、生活保護受給につながった。
- 家族や学校とは違う場でその子らしい年齢相応の時間をすごせるように配慮した。
- 自己肯定感も低く、笑顔が少なかったので、得意なことをのばせる働きかけをした。
- 児童相談所、家庭あんしんセンター、子ども家庭支援センターとの連携、情報共有。
- 進路選択時に学校と連携して、高校進学のフォローをした。
- 対処療法的なことしかできなくて、根本的な解決や効果は難しかった。
- 保健センターの保健師が、家庭の支援および母の主治医と連携をしたこと。
- 子どもの気持ちを聞き、エンパワメントする。
- 学校での居場所作りを心掛けた。
- 保健センターと相談し、自立支援医療につなげた。

②関係機関職員向けアンケート調査

他機関と連携しなかったケースについて

他機関と連携しなかった理由については、「その他」が最も多く、次いで「どの機関と連携すればよいかわからなかったため」及び「所属する事業所のみで支援が可能であり連携は不要と判断したため」となっている。



その他の主な回答

- ・ヤングケアラーである、またはなっていくという認識がなかったため。
- ・そこまで子どもの負担感を感じなかった。
- ・ヤングケアラーという言葉が知らなかった。
- ・連携方法がわからなかった。
- ・連携が必要なのかがわからなかった。
- ・お手伝いレベルの内容と判断したため。

②関係機関職員向けアンケート調査

連携して支援を行う上での課題について

連携して支援を行う上での課題について、213人から回答があった。

- ヤングケアラーの定義を、もっと多くの人を知ることができるとよい。
- チラシや広報誌などの配布でヤングケアラー自身に声を届けることが必要だと思う。
- どのような場合に、どの機関とつながっていけば良いのかがわからない。
- ヤングケアラーと思われる子を見つけたときに、区役所のどの部署につながればよいのかわからない。
- 具体的な解決策がない場合、制度のすき間に入りこんでしまった児童をどうしていくのが課題だと思っている。
- 子どもの支援は「18歳まで」となってしまうことで、支援が途切れたり状況が見えなくなったりする。
- 現状の行政のたて割りの組織では解決できない問題が多く、大きな視点で対応をしていく必要を感じる。
- こちら側がヤングケアラーだと感じていても、本人が家族のためと思い、重荷と感じていない場合は、どのようにアプローチしていくのが課題。
- ヤングケアラーがSOSを発するときの窓口を決めること。

②関係機関職員向けアンケート調査

連携して支援を行う上での工夫していることについて

連携して支援を行う上で特に工夫していることについて、81人から回答があった。

- 個人情報を取扱うので、正確な情報のやりとりと、情報の取扱いを注意している。
- 連携する関係機関とは、できる限り顔が見える関係作り、信頼していただける関係作りをしていきたいと思っている。
- ケースの先を見通した予防的な支援も同時にできるとよい。
- ケアされている人だけを見るのではなく、ケアしている人の生活も考えている。
- 家庭の状況や相手の立場（そうせざるを得ない事情）に配慮して、まず生活の大変さを理解することから助言するようにし、一緒によい方法を考えるというスタンスを忘れない。
- 客観的視点をもってケース検討する。
- 自治体間の切れ目ない支援。
- 他機関と協力しながら見守りを続けていくこと。
- 学校や警察等も含め、地域全体で連絡会を持っている。
- 家族が障害を抱えている世帯に対して、障害者の方にばかりスポットがあてられることが多いので、現場職員を含め、意識を変え、連携するという気持ちを持つ。

②関係機関職員向けアンケート調査

ヤングケアラー支援で困ることについて

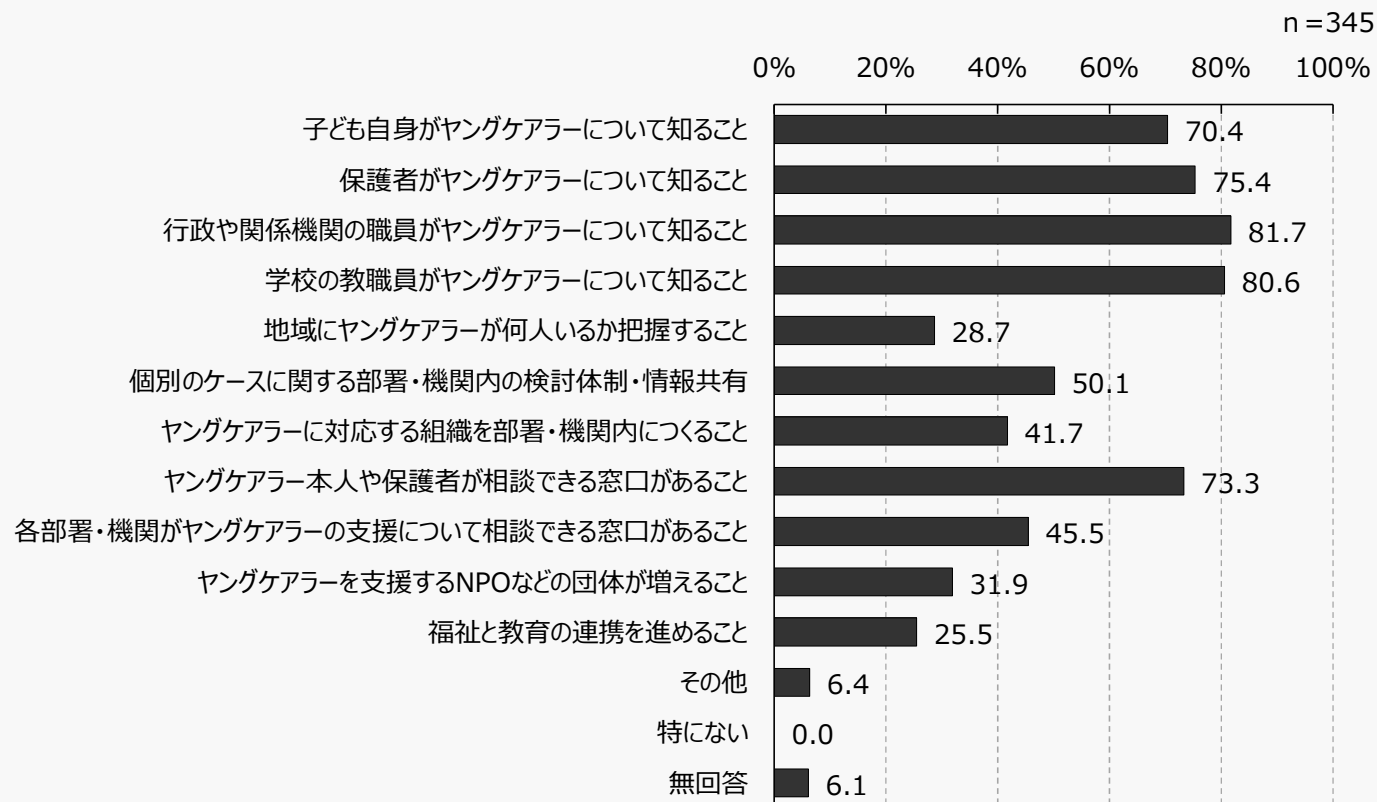
日々の業務の中で、ヤングケアラー支援で困ることについて、118人から回答があった。

- 「ヤングケアラー」だということを子ども自身が気づいていないとき、「それはヤングケアラーだよ」と伝えるのが難しい。
- これからヤングケアラーになるかも…という予備軍はいても、今、大事に至っていないので、行動を起こしにくい。
- 終わりのないケアラーに対して、相談窓口がわからない。年齢で区切られてしまうと、さまざまな年齢の人が相談する所がなくなってしまう。
- 家庭内の問題、家庭内での役割と言われてしまい、代替のサービスや支援がないとき、又サービスがあったとしてもお金が発生する場合は、紹介しても利用に至らない。
- 「保護者の手伝い」という範囲でとらえられることが多い。
- 保護者や子どもにヤングケアラーの認識がなく、対応改善の必要性を感じてもらえない。
- 家庭の問題なのでどこまで踏み込んで良いのか悩む。
- 虐待などとは異なり、どこまで他人である自分が踏み込んだ関わりができるのか難しい。
- 保護者の精神状態が関わる場合の難しさ。

②関係機関職員向けアンケート調査

ヤングケアラー支援に必要だと思うこと

ヤングケアラーを支援するために、必要だと思うことについては、「行政や関係機関の職員がヤングケアラーについて知ること」が最も多く、次いで「学校の教職員がヤングケアラーについて知ること」、「保護者がヤングケアラーについて知ること」となっている。



②関係機関職員向けアンケート調査

具体的に必要だと思うヤングケアラー支援について

具体的に必要だと思う支援について、208人から回答があった。

本人・保護者・家庭への支援

安心できる場所づくりを心がける。
家庭の背景を知ることが大切だと思う。
話を聞いてくれる人や場所、が身近なところにいるということが必要。

ヤングケアラーの認知・周知

社会全体で知ること、理解を深めることが必要。
子どもも大人も知識・情報を得ることが必要。
学校や行政、関係機関への研修というのが必要。

他の機関・地域との連携

チームとなって支援していく。
家族への支援はもちろん、支援者へのサポートも必要。
1人でも多くの人が理解を深め、対応できる人を増やすことが必要。

相談支援体制の整備

SOSを発信しやすい環境づくり。
話がいつでもできる体制があるとよい。

行政としてできる支援

若者支援センター機能が必要。
子どもに頼らざるを得ない状況を、改善できるような支援。